

わたなべ なおき●東京大学文学部宗教学科卒。平凡社で『太陽』を編集、『SPA!』『週刊アスキー』などを創刊、編集長を務める。『婦人公論』編集長を経て、2003年より大正大学文学部教授。『宗教と現代がわかる本2008』を責任編集



『オーバ!』の開高健、高橋昇両氏を偲び、アマゾン川で釣りに挑戦。トゥクナレが3尾釣れた

わたなべ なおき
渡邊直樹
本誌編集長

見て、聴いて、食べたブラジル2週間

チャオ ブラジル!



コロコバードの丘に立つキリスト像はリオデジャネイロのシンボルだ
写真提供：筆者（以下も同じ）

42

日本から空路で約30時間
地球の裏側、サンパウロへ

成田発のデルタ航空機はアメリカのアトランタで5時間のトランジットのあと、さらに10時間のフライトでサンパウロに到着。成田を発つてから約30時間経っていた。9月半ばのブラジルは冬から春に向かう季節。朝の空気は涼しい。

ジャパンファウンデーションサンパウロ日本文化センターの高橋ジョーさんの案内で、街の中央にあるイ

ブラヒェラ公園内のサンパウロ近代美術館へ。そこで、ブルーツリーホテルを各地で運営する青木智栄子社長と面会。「私が受け継いだ日本の『もてなしの心』をブラジルでさらに伝えたい」と青木社長は抱負を語ってくれた。同美術館の設計者はブラジルを代表する建築家、オスカー・ニーマイヤー。日本人の写真家・川内倫子がブラジル各地を3年がかりで撮影した写真展「セメアル」を開催中だった。

ブラヒェラ公園内のサンパウロ近代美術館へ。そこで、ブルーツリーホテルを各地で運営する青木智栄子社長と面会。「私が受け継いだ日本の『もてなしの心』をブラジルでさらに伝えたい」と青木社長は抱負を語ってくれた。同美術館の設計者はブラジルを代表する建築家、オスカー・ニーマイヤー。日本人の写真家・川内倫子がブラジル各地を3年がかりで撮影した写真展「セメアル」を開催中だった。





鉄道の駅を改装したサンパウロ・コンサートホールのロビー

『Zupi』は若手グラフィックデザイナー集団が年4回発行するデザイン季刊誌。日本的なモチーフを用いた作品がよく見受けられる



日曜日の公園を歩くと、ブラジルの人種の多様性を目の当たりにする。さまざまな顔つきと肌の色をした人が腕を組んで歩き、自転車に乗り、スケートボードに興じ、走っている。肌の露出部分の広さに思わず目が向いてしまう。公園内の日本館ではブラジルと日本、それぞれの国花であるイペーと桜が隣り合わせに咲いていた。

みる。日本の浮世絵、襷絵から鉄腕アトム、鉄人28号まで、自由にアレンジ、カラーージュしたイラストが誌面に踊っている。よくできている。駅の構内を改装したホールでサンパウロ交響楽団を聴く

サンパウロ滞在の5日間に多くの方にお目にかかった。自らヴァイオリンを弾きクラシック音楽評も書く西林万寿夫 在サンパウロ総領事には南米のクラシック音楽事情を教えてくださいました。「アルゼンチンはもちろん、ブラジルもオペラをはじめとするヨーロッパ音楽の伝統を受け継いでいることを知ってほしい。日本にもサンパウロ交響楽団をぜひ送りたい」と力説。

夕方、総領事推薦のサンパウロ交響楽団を聴きに出かけた。通勤時間の道路渋滞に巻き込まれるおそれがあるとのことで、ホテル近くのレバノン料理の店で、揚げた肉まん風の食べ物を持ち食い。隣は手巻き寿司スタンド。ヘルシーな手巻き寿司は大人気だ。

会場のサンパウロ・コンサートホールは鉄道のターミナルを改装した音楽ホール。開演前に、コーラス指

揮者のナオミ・ムナカタさんに会うことができた。「プロテスタントの牧師をしていた父の影響で自然に合唱に親しむようになった」というナオミさんは国立音楽大学卒業後、指揮者になった。

『エレクトラ』(R・シュトラウス作曲)の演奏が始まると、大編成のオーケストラの奏でる音楽はホールに響き渡った。終演後の舞台と客席は互いに顔見知りのように、なごやかに交歓している。市からの助成金でチケットが安いこともあるが、市民が自分たちのオーケストラを誇りとし、オーケストラも市民のなかに自然に融けこんでいる。

サンパウロ大学ではセイジ・ヒラノ副学長と森幸一教授に話をうかがった。副学長は、ブラジルが世界の食糧倉庫となるプログラムや、日本ブラジル交流年に向けて大学で企画しているプロジェクトについて語ってくださった。日伯の大学のみならず大企業も参画する、未来に向けての新しい動きが始まるうとしてしている。

東洋人街リベルダーデで日本移民の歴史を学ぶ

ブラジルで著名なデザイナーのジ



サンパウロの市営市場では日系人が日本人になじみの野菜を売っている



縫製の街、ボン・レチーロのボタン専門店



ファッションショーの様様を映写してくれたジュン・ナカオ氏

ユン・ナカオ氏は、サンパウロ日本文化センターホールで、氏の代表的なファッションショーの映像を見せてくれた。モデルたちが着用していた紙製の純白の衣装を最後に破り捨てる、という大胆な演出で大きな話題となったものだ。

話の流れで、縫製の街ボン・レチーロを案内してくれることになった。かつてはユダヤ人街、その後韓国人が進出し、最近ではボリビア人も出店している。ミシン専門店、ボタン専門店、型紙だけ販売しているスタンド、布の専門店などを見て回る。レストランも多様だ。ギリシア料理店もあれば、アラブ人が経営するユダヤ料理の店もあるくらいだから、手巻き寿司も売っている韓国料理店など当たり前。ユダヤ料理店で話の続きを聞いたあと、雑誌の表紙撮影があるというナカオ氏と別れて、リベルダーデの東洋人街にある日本移民資料館へ。

苦難の歴史を背負った展示物は、私の胸の中に飛びこんできてズシンと重みを増す。日本敗戦後の混乱のなかで、いわゆる「勝ち組」が「負け組」を脅迫するために送りつけた

「位牌」の前で、当時の複雑な状況と極限の心理状態に思いをはせ、立ちつくしてしまった。売店には古いレコードもあった。柳家金語楼「落語傑作集」、森繁久弥「悲しき軍歌／戦友」などを購入。移民の父・上塚周平（俳号・瓢骨）の俳句「夕ざれや 木陰に泣いて コーヒーもぎ」。

同じ建物内のサンパウロ人文科学研究所で、前所長の宮尾進氏に話をうかがう。宮尾氏はブラジル日本移民史のなかの混乱期について調べた『臣道聯盟』を著している。移民80年に際して、日系社会について大規模な調査を行なった宮尾氏は、日系人も混血が進み、変わってきたという。100周年を一過性のイベントにしてはならないと強調されていた。1階フロアに移り、ブラジル日本文化協会の上原幸啓会長から、100周年記念行事の内容についてうかがう。日系移民たちが日本文化を教

えることにいかに努めてきたか、温厚な会長の話に熱がこもる。「日系移民は貧しくとも教育に力を注ぎ、農業とくに野菜・果物栽培でブラジル人の食生活の改善に寄与し、『日本人は信頼できる』という定評を確

立してきた。その歴史を忘れないように伝えていきたい」。サンパウロ州政府は現在、150万ドルの予算をつけて日本文化を日系人以外にも教えているという。

SOGGOビルに充滿する オタク文化のあやしい気配

出版物売り上げの50%強を占めるブラジル最大の出版社アブリル社を訪問。同社で100周年プロジェクトの責任者を務めるアルフレド・オガワ氏に、そのビジョンを説明してもらおう。インターネットを活用して「自分史」を作成するように日系移民の家系図を作っていくというものだ。「移民史とはひとりひとりが作りあげるもの」という理念は従来にない新しい発想だ。過去にとどまるのではなく、未来へ向けて新たな日系移民のアイデンティティの確認とブラジル社会の可能性を探るプロジェクトとして興味深い。

同社からほど近いトミエ・オオタケ・インスティテュートで、館長のリカルド・オオタケ氏にお目にかかった。同氏の母上はブラジルを代表する彫刻家トミエ・オオタケ氏だ。ブラジルで美術が人々のなかに浸透

4°	FUJI	(Piso)	Lojas	401 ~ 429
3°	NAGANO	(Piso)	Lojas	301 ~ 305
	OSAKA	(2° Piso)	Lojas	201 ~ 234
1°	KYOTO	(1° Piso)	Lojas	101 ~ 134
M	NARITA	(Mezanino)	Lojas	m1/m2/m3
T	TOKYO	(Térreo)	Lojas	001 ~ 030

オタクが日本のマンガやアニメを求めて集まるリベルダーデのSOGOビル。フロアの名前はなぜか日本の地名



リベルダーデの日本食専門店「丸海」では本格焼酎「HAKKON」も売られていた



市営市場には早朝出かけてみた。巨大な牛肉の塊、マグロ、ポルトガル料理の伝統を継ぐ乾燥タラ、各種香辛料、コショウ、唐辛子、イタリア料理の各種食材、チーズ、オリーブオイル、豊富な果物に野菜、大根、白菜、ニンジン、キャベツなど。野菜を扱うのは日系人が多いが、イタリア系が圧倒的に大きなスペースを占めている。分厚いハムサンドとコーヒーで朝食。コーヒーが美味

している理由などをたずねた。そういえば飛行場からサンパウロ市内に向かっていったときに、道路の傍の掘っ立て小屋の壁にかけられた十数個のタイヤのホイールが太陽の光を反射してキラキラ輝いているのを見かけたが、あれなど現代アートそのものだった。日本を代表するアーティストの大竹伸朗氏に、ブラジルのフアベラに住み込んで作品を制作してもらおうというアイデアが湧いた。「ゴミ」をアートに変貌させるエネルギーギッシュな大竹マジックと力強い作品は、広大なブラジルとフアベラにきつとよく似合う。同じオオタク姓でもあり、リカルド館長に提案した。



トミエ・オオタケ・インスティテュート。設計はトミエ氏の息子ルイ・オオタケ氏

でおかわり。「じゃあ、またね」の「チャオ」が飛びかっている。「チャオ、チャオ！」。リベルダーデを散策。美観上好ましくないから市内の看板は取り外せ、という条例を市長が発布したため、観光ガイドブックでよく見た日本語の看板の多くは撤去されていた。これでは景観上も観光上も逆効果だ。日本食専門スーパーには醤油、味噌、ダシの素、羊羹まで売られている。気になっていたあやしげな雰囲気のスOGOビルに踏み込む。世界のオタクの聖地、東京・秋葉原のラジオ会馆あるいは中野ブロードウ

エイと同じニオイと空気がグッズ。日本マンガ・アニメの海賊版、フィギュアに、日本もどき不思議グッズ、世界のあやしげヒーリンググッズもさまざまあり。高橋ジョーさん掛け付けの店でマッサージと針治療を90分。リフレッシュして、さあ、リオへ。サンバのリズムとともにリオの夜はふける。広大な国土のブラジルでは、主要な都市間の移動は飛行機が中心。約1時間のフライトでサントス・デウモン空港へ。リオデジャネイロだ。リオの観光名所、ボンデアスカルを

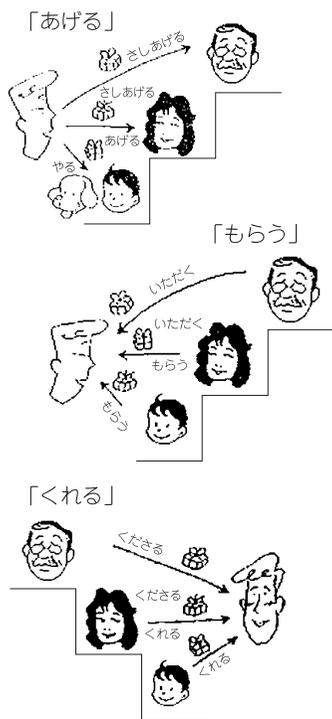


ブラジリア郊外パーレ・ド・アマニエセルの宗教団体の施設



リオデジャネイロ、ラバの街角で歌声に合わせて踊る老夫婦

status social das pessoas envolvidas



マナウスの日本語学校の教室に貼られていた教材

望むレストランで北原聡美リオデジャネイロ州立大学教授に話を聞いた。北原氏は浜松の大鳳上げをコパカーバーナ海岸で行なうイベントも企画。今後は日本とブラジルの外交史研究を進めていく予定だ。

ブラジル銀行が運営する文化センターは、今リオで一番注目されている文化施設だ。館内に展覽会場、映画・演劇の上演用ホール、図書館などを有し、低料金あるいは無料で市民や子供たちの利用に提供している。かつて銀行の本店として利用された建物は重厚だが、運営の仕方は柔軟で、専門のスタッフにより魅力的なプログラムが企画されている。

リオに来たら音楽を聴かなくては。ライブが盛んで人気のスポット、ラパ界隈に出かけた。居酒屋でピー

ル(シヨッピ)を飲んで外へ出ると歌声が聞こえる。街角で10人編成のバンドをバックに、60代くらいの男性が昔風のサンバを歌っていた。老若男女(年配者が多い)が集まり、毎ビル片手に音楽を聴いたり踊ったり。ライブハウスに行くとなすで満員。開演は10時半。シヨロロなど4種類くらいの音楽を演奏し最後はサンバだ。いつの間にか全員踊っていた。

イパネマではボサノバの名曲の作曲家として知られるヴィニシウス(デ・モライス)の名前を冠したCDショップへ。ボサノバやシヨロロのCDを選んでレジに持っていくと、「昨日の晩来ればジョン・レノンの息子のシヨーンと、トム・ジョビンの孫がすぐ近くでライブをしていた

のよ。二人で『イマジン』も歌ったわ」。残念！日本のバンドでイパネマに合うのは横山剣とクレイジーケンバンドだ。「イイネ！」。

ブラジリア、そしてマナウスへブラジルを縦断する

リオからブラジリアへは飛行機で2時間弱。ブラジリアといえば人工的な近未来都市というイメージだが、それを横目に郊外のパーレ・ド・アマニエセルへ。ブラジルにはさまざまな宗教が持ち込まれ、独特の宗教も数多く誕生している。ここでは女性霊能者ネイバのもとに集まった人々がつくった宗教団体の施設なのだ。

「オズの魔法使い」の国に迷い込んだような色鮮やかな衣装と施設。ブラジルの宗教にたくわしく、アフリカ系のカンドンブレと神道の比較研究もしているブラジル外務省のマルクス・V・マルケス氏の話では、ブラジルの宗教は信者の多い順番に①カトリック、②プロテスタント、③エスプリティズモ(心靈主義)、④アフリカ系、⑤日系、となっているという。アフリカ系のカンドンブレにアフリカ系以外の信者が、日系宗教に



カンピーナスの東山農場にひろがるコーヒー園

日系人以外の信者が近年増えているのが近年の特徴だという。

アマゾンの中流、マナウスへは3時間弱のフライト。現地の日本語学校について錦戸健。日伯協会教育担当理事に聞き、授業も見学した。ホンダなど日本の工場の進出に伴い、日本語の学習希望者は増加し、生徒数は2000年の120名から現在は子供向けと成人向けコースを合わせて500名に増えている。アマゾンの魚トウクナレのスープに川鯛のフライなど、錦戸先生にご馳走していただいた。あっさりして胃にやさしく美味だった。

アマゾン移民は「出稼ぎ」ではな

く最初から「定住」覚悟で移住して来たという。コーヒー豆の袋に使うジュートを初めてブラジルで栽培するのに尽力した「高拓生（高等拓殖学校の卒業生）」など、サンパウロとは異なるアマゾン移民たちの独自の活動について総領事館でうかがった。現在、工業団地によって経済が成り立つことが森林伐採への防波堤にもなっているようだ。

帰国の前日、空路サンパウロに戻り、そこから車で2時間走ってカンピーナスへ。三菱財閥を起こした岩崎家が代々運営してきたコーヒー園を主体とする東山農場へ。岩崎透社長に案内していただいた。コーヒー

のほかにも日本酒の「東麒麟^{あづまきりん}」や醬油も生産し、ブラジルに定着している。現在は野菜の品種改良に向けて日本企業数社と組み、まがいものではない「本当の和食のころ」を、ブラジルで生産した食材を用いて、ブラジルの土で焼いた食器で提供することを目指している。

「日本ブラジル交流年」に向けてブラジルからは熱気が伝わってきた。それに対して日本人々はどれだけ正面から向き合い、受け止め、考えているのだろうか。「移民」を含めて日伯の交流は過去のことではなく、未来へ向けてのチャレンジは今も続いている。☺